

対人関係代替性が社会的排斥の心理的ダメージに与える影響の実験的検討

05060001 会津 祥平

指導教員: 結城雅樹

本研究は、ある社会に存在する、新しい対人関係を形成する機会の多さである関係流動性 (Yuki et al., 2007) に注目し、社会的排斥をされた人々に生じる心理的苦痛のパターンが、人々を取り巻く社会生態学的環境によってどのように異なるか検証することを目的とした。

低関係流動性社会では、新たな対人関係形成の機会が少ないため、人々は既存の対人関係に留まらざるを得ない。こうした社会状況で個人にとって最もダメージが大きいのは、既存関係から排斥されてしまうことである。それは既存関係の喪失を埋め合わせる代替関係の形成が困難なためである。一方、高関係流動性社会は、新規関係形成の機会が多く、人々が既存関係よりも利益の得られる相手との関係形成を求めて絶えず競争している、「対人関係の自由市場」である。このような状況においては、低関係流動性状況と比べて、新たに出会った望ましい他者から拒絶された場合のダメージが大きい。なぜならば、新規他者からの拒絶は、自らの社会的価値が十分でなかったことを意味するからである。しかし、その後他の望ましい他者から関係相手として受容されれば、それは自身の社会的価値が高かったことを意味するため、以前の被排斥によって生じた心理的苦痛は大きく回復すると予測される。以上より導かれるのは以下の仮説である。仮説1: 低関係流動性社会の人々は、友人からの排斥によって生じる心理的苦痛が大きい。一方、高関係流動性社会の人々は、新規他者からの排斥によって生じる心理的苦痛が大きい。仮説2: 他者からの排斥によって生じる心理的苦痛は、代替他者からの受容によって回復するが、その回復の程度は社会の関係流動性が高いほど大きい。

上記の仮説を検証するため、場面想定法を用いた質問紙実験を行った。結果は予測通りであった。自らが置かれた社会状況を低関係流動的であると知覚していた人は、高関係流動的であると知覚していた人と比べて、新規他者から排斥されたときにより大きな心理的苦痛を感じた。一方、高流動性状況に置かれた人は、低関係流動性状況に置かれた人と比べて、友人から排斥されたときにより大きな心理的苦痛を感じた。さらに、高流動性状況の人々は、低流動性状況の人と比べて、新規他者からの排斥後に代替者から受容されることによって、それ以前に排斥された際の心理的苦痛を大きく回復する結果が得られた。

以上から、他者からの排斥によって生じる心理的苦痛と排斥者との関連、および排斥者と別の他者からの受容によって心理的苦痛が回復する程度は、社会の関係流動性によって異なることが示された。